

# 双子の星

宮沢賢治

青空文庫



双子の星 一

天あまの川がわの西の岸にすぎなの胞子ほうしほどの小さな二つの星が見えます。あれはチュンセ童子とポウセ童子という双子のお星さまの住んでいる小さな水すい精しょうのお宮です。

このすきとおる二つのお宮は、まっすぐに向い合っています。夜は二人とも、きつとお宮に帰って、きちんと座すわり、空の星めぐりの歌に合せて、一晚銀笛ぎんてきを吹ふくのです。それがこの双子のお星様の役目でした。

ある朝、お日様がカツカツカツと厳おごそかにお身体からだをゆすぶって、東から昇のぼっておいでになった時、チュンセ童子は銀笛を下に置いてポウセ童子に申しました。

「ポウセさん。もういいでしょう。お日様もお昇りになったし、雲もまっ白に光っています。今日は西の野原の泉へ行きませんか。」

ポウセ童子が、まだ夢むちゆう中で、半分眼めをつぶったまま、銀笛を吹いていますので、チュンセ童子はお宮から下りて、沓くつをはいて、ポウセ童子のお宮の段にのぼって、もう一度云いいました。

「ポウセさん。もういいでしょう。東の空はまるで白く燃えているようですし、下では小さな鳥なんかもう目をさましている様子です。今日は西の野原の泉へ行きませんか。そして、かざぐるま風車きりで霧をこしらえて、小さな虹にじを飛ばして遊ぼうではありませんか。」

ポウセ童子はやつと気がついて、びっくりして笛を置いて云いました。

「あ、チュンセさん。失礼いたしました。もうすっかり明るくなったんですね。僕ぼく今すぐ沓をはきますから。」

そしてポウセ童子は、白い貝殻かいがらの沓をはき、二人は連れだつて空の銀の芝原しばはらを仲よく歌いながら行きました。

「お日さまの、

お通りみちを はききよ浄め、

ひかりをちらせ あまの白雲。

お日さまの、

お通りみちの 石かけを

深くうずめよ、あまの青雲。」

そしてもういつか空の泉に來ました。

この泉は霽れた晩には、下からはつきり見えます。天の川の西の岸から、よほど離れた処ところに、青い小さな星で円くかこまれてあります。底は青い小さなつぶ石でたいらにうずめられ、石の間から奇麗きれいな水が、ころころころ湧わき出して泉の一方のふちから天の川へ小さな流れになつて走つて行きます。私共の世界が早ひでりの時、瘡やせてしまった夜鷹よだかやほととぎすなどが、それをだまつて見上げて、残念そうに咽喉のどをくびくびさせているのを時々見ることがあるではありませんか。どんな鳥でもとてもあそこまでは行けません。けれども、天てんの大おお鳥おがらすの星ほしや蠍さそりの星ほしや兎うさぎの星ほしならもちろんすぐ行けます。

「ポウセさんまずここへ滝たきをこしらえましようか。」

「ええ、こしらえましよう。僕石を運びますから。」

チウンセ童子が沓をぬいで小流れの中に入り、ポウセ童子は岸から手ごろの石を集めはじめました。

今は、空は、りんごのいい匂においいで一杯いっぱいです。西の空に消え残った銀色のお月様が吐はいたのです。

ふと野原の向うから大きな声で歌うのが聞えます。

「あまのがわの にしのきしを、

すこしはなれたそらの井戸。

みずはころろ、そこもきらら、

まわりをかこむあおいほし。

夜鷹ふくろう、ちどり、かけす、

来よとすれども、できもせぬ。」

「あ、大鳥の星だ。」童子たちは一いっしょ緒よに云いました。

もう空のすすきをざわざわと分けて大鳥が向うから肩かたをふって、のっしのっしと大股おおまたにやつて参りました。まっくろなびろうどのマントを着て、まっくろなびろうどの股引ももひきをおはいて居おります。

大鳥は二人を見て立ちどまって丁寧ていねいにお辞儀じぎしました。

「いや、今日は。チュンセ童子とポウセ童子。よく晴れて結構ですな。しかしどうも晴れると咽喉かわが乾かわいていけません。それに昨夜ゆうべは少し高く歌い過ぎましてな。ご免下さい。」と云いながら大鳥は泉いづみに頭こをつき込みました。

「どうか構たわくわないで沢山たくさんの呑のんで下さい。」とポウセ童子が云いました。

大鳥は息もつかずに三分ばかり咽喉のどを鳴らして呑んでからやっちと顔かほをあげて一寸ちよつと眼まなこを

パチパチ云わせてそれからブルルツと頭をふって水を払いました。

その時向うから暴い声の歌が又聞えて参りました。大鳥は見る見る顔色を変えて身体を烈しくふるわせました。

「みなみのそらの、赤眼のさそり

毒ある鉤と 大きなはさみを

知らない者は 阿呆鳥。」

そこで大鳥が怒つて云いました。

「蠍星です。畜生。阿呆鳥だなんて人をあてつけてやがる。見ろ。ここへ来たら

その赤眼を抜いてやるぞ。」

チユンセ童子が

「大鳥さん。それはいけないでしょう。王様をご存じですよ。」という間もなくもう赤い眼の蠍星が向うから二つの大きな鋏をゆらゆら動かし長い尾をカラカラ引いてやって来るのです。その音はしずかな天の野原中にひびきました。

大鳥はもう怒つてぶるぶる顫えて今にも飛びかかりそうです。双子の星は一生けん命手まねでそれを押えました。

蠍は大鳥を尻眼しりめにかけてもう泉のふち迄までは這つて来て云いました。

「ああ、どうも咽喉のどが乾いてしまった。やあ双子さん。今日は。ご免なさい。少し水を呑んでやろうかな。はてな、どうもこの水は変に土臭つちくさいぞ。どこかのまつ黒な馬鹿アが頭をつつ込んだと見える。えい。仕方ない。我慢がまんしてやれ。」

そして蠍は十分ばかりごくりごくりと水を呑みました。その間も、いかにも大鳥を馬鹿にする様に、毒の鉤のついた尾をそちらにパタパタ動かすのです。

とうとう大鳥は、我慢兼ねて羽をパツと開いて叫さけびました。

「こら蠍。貴様はさつきから阿呆鳥だの何だのと俺おれの悪口を云ったな。早くあやまつたらどうだ。」

蠍がやつと水から頭をはなして、赤い眼をまるで火が燃えるように動かししました。

「へん。誰たれか何か云つてるぜ。赤いお方だろうか。鼠ねずみ色のお方だろうか。一つ鉤をお見舞みまいしますかな。」

大鳥はかつとして思わず飛びあがつて叫びました。

「何を。生意気な。空の向う側へまっさかさまに落してやるぞ。」

蠍も怒つて大きなからだをすばやくひねつて尾の鉤を空に突き上げました。大鳥は飛び



あがつてそれを避け今度はくちばしを槍やりのようにしてまっすぐに蠍の頭をめがけて落ちて来ました。

チウンセ童子もポウセ童子もとめるすぎがありません。蠍は頭に深い傷を受け、大鳥は胸を毒の鉤でさされて、両方ともウンとうなったまま重なり合つて気絶してしまいました。蠍の血がどくどく空に流れて、いやな赤い雲になりました。

チウンセ童子が急いで沓くつをはいて、申しました。

「さあ大変だ。大鳥には毒がはいったのだ。早く吸いとつてやらないといけない。ポウセさん。大鳥をしつかり押えていて下さいませんか。」

ポウセ童子も沓をはいてしまつていそいで大鳥のうしろにまわつてしつかり押えました。チウンセ童子が大鳥の胸の傷口に口をあてました。ポウセ童子が申しました。

「チウンセさん。毒を呑んではいけませんよ。すぐ吐き出してしまわないといけませんよ。」

チウンセ童子が黙だまつて傷口から六遍べんほど毒のある血を吸つてはき出しました。すると大鳥がやっと気がついて、うすく目を開いて申しました。

「あ、どうも済みません。私はどうしたのですかな。たしか野郎をし止めたのだが。」

チユンセ童子が申しました。

「早く流れてその傷口をお洗いなさい。歩けますか。」

大鳥はよろよろ立ちあがつて蠍を見て又身体からだをふるわせて云いました。

「畜生。空の毒虫め。空で死んだのを有り難がたいと思え。」

二人は大鳥を急いで流れへ連れて行きました。そして奇麗きれいに傷口を洗ってやって、その上、傷口へ二三度かくわ香しい息を吹きかけてやって云いました。

「さあ、ゆるゆる歩いて明るいうちに早くおうちへお帰りなさい。これからこんな事をし  
てはいけません。王様はみんなご存じですよ。」

大鳥はすっかり悄気しよげで翼つばさを力なく垂れ、何遍もお辞儀をして

「ありがとうございます。ありがとうございます。これからは気をつけます。」と云いながら脚あしを引きずって銀のすすきの野原を向うへ行つてしまいました。

二人は蠍を調べて見ました。頭の傷はかなり深かったのですがもう血がとまっています。二人は泉の水をすくつて、傷口にかけて奇麗に洗いました。そして交かわる交かわるふつふつと息をそこへ吹き込みました。

お日様が丁度空のまん中においでになった頃ころ蠍はかすかに目を開きました。

ポウセ童子が汗をふきながら申しました。

「どうですか気分は。」

蠍がゆるく呟つぶやきました。

「大烏めは死にましたか。」

チウンセ童子が少し怒って云いました。

「まだそんな事を云うんですか。あなたこそ死ぬ所でした。さあ早くうちへ帰る様に元氣をお出しなさい。明るいうちに帰らなかつたら大変ですよ。」

蠍が目を變に光らして云いました。

「双子さん。どうか私を送って下さいませんか。お世話の序ついでです。」

ポウセ童子が云いました。

「送ってあげましょう。さあおつかまりなさい。」

チウンセ童子も申しました。

「そら、僕にもおつかまりなさい。早くしないと明るいうちに家に行けません。そうすると今夜の星めぐりが出来なくなりませす。」

蠍さそりは二人につかまってよろよろ歩き出しました。二人の肩かたの骨は曲りそうになりました。

実に蠍のからだは重いのです。大きさから云つても童子たちの十倍位はあるのです。

けれども二人は顔をまつ赤にしてこらえて一足ずつ歩きました。

蠍は尾をギーギーと石ころの上に引きずつていやな息をはあはあ吐いてよろりよろりであるのです。一時間に十町とも進みません。

もう童子たちは余り重い上に蠍の手がひどく食い込んで痛いので、肩や胸が自分のものかどうかもわからなくなりました。

空の野原はきらきら白く光っています。七つの小流れと十の芝原しばはらとを過ぎました。

童子たちは頭がぐるぐるしてもう自分が歩いているのか立っているのかわかりませんでした。それでも二人は黙つてやはり一足ずつ進みました。

さつきから六時間もたっています。蠍の家まではまだ一時間半はかかりましょう。もうお日様が西の山にお入りになる所です。

「もう少し急げませんか。私も、もう一時間半のうちにおうちへ帰らないといけないんだから。けれども苦しいんですか。大変痛みますか。」とポウセ童子が申しました。

「へい。もう少しでございます。どうかお慈悲じひでございます。」と蠍が泣きました。

「ええ。も少しです。傷は痛みますか。」とチュンセ童子が肩の骨の砕くだけそうなのをじつ

とこらえて申しました。

お日様がもうサツサツサツと三遍おごそ巖かにゆらいで西の山にお沈しずみになりました。

「もう僕ぼくらは帰らないといけない。困つたな。ここらの人は誰たれか居ませんか。」ポウセ童子が叫びました。天の野原はしんとして返事もありません。

西の雲はまっかにかがやき蠍の眼めも赤く悲しく光りました。光の強い星たちはもう銀の鎧よろいを着て歌いながら遠くの空へ現われた様子です。

「一つ星めつけた。長者になあれ。」下で一人の子供がそつちを見上げて叫んでいます。

チウンセ童子が

「蠍さん。も少しです。急げませんか。疲つかれましたか。」と云いました。

蠍あわが哀あわれな声で、

「どうもすつかり疲れてしまいました。どうか少しですからお許し下さい。」と云います。  
「星さん星さん一つの星で出ぬもんだ。」

千も万もでるもんだ。」

下で別の子供が叫んでいます。もう西の山はまっ黒です。あちこち星がちらちら現われ  
ました。

チウンセ童子は背中がまがつてまるで潰れそうになりながら云いました。

「蠅さん。もう私らは今夜は時間に遅れました。きつと王様に叱られます。事によったら流されるかも知れません。けれどもあなたがふだんの所に居なかつたらそれこそ大變です。」

ポウセ童子が

「私はもう疲れて死にそうです。蠅さん。もつと元気を出して早く帰って行って下さい。」と云いながらとうとうバツタリ倒れてしまいました。蠅は泣いて云いました。

「どうか許して下さい。私は馬鹿です。あなた方の髪の毛一本にも及びません。きつと心を改めてこのおわびは致します。きつといたします。」

この時水色の烈しい光の外套を着た稲妻が、向うからキラツとひらめいて飛んで来ました。そして童子たちに手をつけて申しました。

「王様のご命でお迎いに参りました。さあご一緒に私のマントへおつかまり下さい。もうすぐお宮へお連れ申します。王様はどう云う訳かさつきからひどくお喜びでございませぬ。それから、蠅。お前は今まで憎まれ者だったな。さあこの薬を王様から下すつたんだ。飲め。」

童子たちは叫びました。

「それでは蠍さん。さよなら。早く薬をのんで下さい。それからさつき約束ですよ。きつとですよ。さよなら。」

そして二人は一緒に稲妻のマントにつかまりました。蠍が沢山の手をついて平伏して薬をのみそれから丁寧にお辞儀をします。

稲妻がぎらぎらつと光つたと思うともういつかさつきの泉のそばに立って居りました。そして申しました。

「さあ、すっかりおからだをお洗いなさい。王様から新らしい着物と沓を下さいました。まだ十五分間があります。」

双子のお星様たちは悦んでつめたい水晶のような流れを浴び、匂のいい青光りのうすものの衣を着け新らしい白光りの沓をはきました。するともう身体の痛みもつかれも一遍にとれてすがすがしてしまいました。

「さあ、参りましょう。」と稲妻が申しました。そして二人が又そのマントに取りつきますと紫色の光が一遍ぱつとひらめいて童子たちはもう自分のお宮の前に居りました。稲妻はもう見えません。

「チユンセ童子、それでは支度したくをしましょう。」

「ポウセ童子、それでは支度をしましょう。」

二人はお宮にのぼり、向き合つてきちんと座すわり銀笛ぎんてきをとりあげました。  
丁度あちこちで星めぐりの歌がはじまりました。

「あかいめだまの さそり

ひろげた驚わしの つばさ

あおいめだまの 小さいぬ、

ひかりのへびの とぐろ。

オリオンは高く うたい

つゆとしもとを おとす、

アンドロメダの くもは

さかなのくちの かたち。

大ぐまのあしを きたに



五つのぼした ところ。

小熊こくまのひたいの うえは

そらのめぐりの めあて。」

双子のお星様たちは笛ふを吹きはじめました。

## 双子ふたごの星 二

(天あまの川がわの西の岸に小さな小さな二つの青い星が見えます。あれはチユンセ童子とポウセ童子という双子のお星様でめいめい 水すい 精しやうでできた小さなお宮に住んでいます。)

二つのお宮はまっすぐに向い合っています。夜は二人ともきつとお宮に帰ってきちんと座ってそらの星めぐりの歌に合わせて一晚銀笛を吹くのです。それがこの双子のお星様たちの役目でした。)

ある晩空の下の方が黒い雲で一杯いっぱいに埋うまり雲の下では雨がザアツザアツと降おって居おりました。それでも二人はいつものようにめいめいのお宮にきちんと座おって向むいてあつて笛を

吹いていますと突然大きな乱暴ものの彗星がやって来て二人のお宮にフツフツと青白い光の霧をふきかけて云いました。

「おい、双子の青星。すこし旅に出て見ないか。今夜なんかそんなにしなくてもいいんだ。いくら難船の船乗りが星で方角を定めようたつて雲で見えはしない。天文台の星の係りも今日は休みであくびをしてる。いつも星を見ているあの生意気な小学生も雨ですっかりへこたれてうちの中で絵なんか書いているんだ。お前たちが笛なんか吹かなくなつて星はみんなくなるくるまわるさ。どうだ。一寸旅へ出よう。あしたの晩方までにはここに連れて来てやるぜ。」

チウンセ童子が一寸笛をやめて云いました。

「それは曇つた日は笛をやめてもいいと王様からお許しはあるとも。私らはただ面白くて吹いていたんだ。」

ポウセ童子も一寸笛をやめて云いました。

「けれども旅に出るなんてそんな事はお許しがないはずだ。雲がいつはれるかもわからないんだから。」

ほうきほし  
彗星が云いました。

「心配するなよ。王様がこの前俺おれにそう云ったぜ。いつか曇った晩あの双子を少し旅させてやって呉くれってな。行こう。行こう。俺なんか面白いぞ。俺のあだ名は空くの鯨くじらと云うんだ。知ってるか。俺は鰯いわしのようなヒヨロヒヨロの星やめだかのような黒い隕石いしはみんなパクパク呑のんでしまうんだ。それから一番痛快なのはまっすぐに行ってそのまままっすぐに戻る位もとひどくカーブを切きって廻まわるときだ。まるで身体からだが壊こわれそうになってミシミシ云うんだ。光の骨までカチカチ云うぜ。」

ポウセ童子が云いました。

「チュンセさん。行きましようか。王様がいいっておっしゃったそうですから。」

チュンセ童子が云いました。

「けれども王様がお許ゆるしになつたなんて一体本当でしょうか。」

彗星が云いました。

「へん。偽うそなら俺の頭かぶが裂さけてしまふがいいさ。頭と胴と尾とばらばらになって海へ落ちて海鼠なまこにでもなるだろうよ。偽うそなんか云うもんか。」

ポウセ童子が云いました。

「そんなら王様に誓ちかえるかい。」

彗星はわけもなく云いました。

「うん、誓うとも。そら、王様ご照覧。ええ今日、王様のご命令で双子の青星は旅に出ます。ね。いいだろう。」

二人は一緒に云いました。

「うん。いい。そんなら行こう。」

そこで彗星がいやに真面目くさつて云いました。

「それじゃ早く俺のしつぽにつかまれ。しつかりとつかまるんだ。さ。いいか。」

二人は彗星のしつぽにしつかりつかまりました。彗星は青白い光を一つフウとはいて云いました。

「さあ、発つぞ。ギイギイギイフウ。ギイギイフウ。」

実に彗星は空のくじらです。弱い星はあちこち逃げまわりました。もう大分来たのです。二人のお宮もはるかに遠く遠くなつてしまひ今は小さな青白い点にしか見えません。

チユンセ童子が申しました。

「もう余程来たな。天の川の落ち口はまだだらうか。」

すると彗星の態度がガラリと變つてしまひました。

「へん。天の川の落ち口よりお前らの落ち口を見る。それ一い二の三。」  
 彗星は尾を強く二三遍動かしおまけにうしろをふり向いて青白い霧を烈しくかけて二人を吹き落してしまいました。

二人は青ぐろい虚空をまつしぐらに落ちました。

彗星は、

「あつはつは、あつはつは。さっきの誓いも何もかもみんな取り消しだ。ギイギイギイ、フウ。ギイギイフウ。」と云いながら向うへ走って行ってしまいました。二人は落ちながらしつかりお互の脇をつかみました。この双子のお星様はどこ迄でも一緒に落ちようとしたのです。

二人のからだは空気の中にはいつてからは雷のように鳴り赤い火花がパチパチあがり見えてさえぬまいがする位でした。そして二人はまつ黒な雲の中を通り暗い波の咆えていた海の中に矢のように落ち込みました。

二人はずんずん沈みました。けれども不思議なことには水の中でも自由に息ができました。です。

海の底はやわらかな泥で大きな黒いものが寝ていたりもやもやの藻がゆれたりしました。

チウンセ童子が申しました。

「ポウセさん。ここは海の底でしょうね。もう僕たちは空に昇れません。これからどんな目に遭うでしょう。」

ポウセ童子が云いました。

「僕らは彗星に欺されたのです。彗星は王さまへさえ偽をついたのです。本当に憎いやつではありませんか。」

するとすぐ足もとで星の形で赤い光の小さなひとでが申しました。

「お前さんたちはどこの海の人たちですか。お前さんたちは青いひとでのしるしをつけていますね。」

ポウセ童子が云いました。

「私らはひとではありません。星ですよ。」

するとひとでが怒って云いました。

「何だと。星だつて。ひとではもとはみんな星さ。お前たちはそれじゃ今やつとここへ来たんだろう。何だ。それじゃ新米のひとでだ。ほやほやの悪党だ。悪いことをしてここへ来ながら星だなんて鼻にかけるのは海の底でははやらないさ。おいらだつて空に居た時は

第一等の軍人だぜ。」

ポウセ童子が悲しそうに上を見ました。

もう雨がやんで雲がすっかりなくなり海の水もまるで硝子ガラスのように静まってそらがはつきり見えます。天の川もそらの井戸も驚わしの星や琴弾ことひきの星やみんなはつきり見えます。小さく小さく二人のお宮も見えます。

「チュンセさん。すっかり空が見えます。私らのお宮も見えます。それなのに私らはどうとうひとでになつてしまいました。」

「ポウセさん。もう仕方ありません。ここから空のみなさんにお別れしましょう。またおすがたは見えませんが王様におわびをしましょう。」

「王様さよなら。私共は今日からひとでになるのでございます。」

「王様さよなら。ばかな私共は彗ほうきぼし星だまに欺だまされました。今日からはくらい海の底の泥を私共は這はいまわります。」

「さよなら王様。又また天上の皆さま。おさかえを祈いのります。」

「さよならみな様。又すべての上の尊い王さま、いつまでもそうしておいで下さい。」  
赤いひとでが沢たくさん山集つて来て二人を囲んでがやがや云つて居りました。

「こら着物をよこせ。」「こら。剣を出せ。」「税金を出せ。」「もつと小さくなれ。」  
「俺おれの靴くつをふけ。」

その時みんなの頭の上をまつ黒な大きな大きなものがゴーゴーと哮ほえて通りかかりました。ひとではあわててみんなお辞儀じぎをしました。黒いものは行き過ぎようとしてふと立ちどまってよく二人をすかして見て云いました。

「ははあ、新兵だな。まだお辞儀のしかたも習わないのだな。このくじら様を知らんのか。俺のあだなは海の彗ほうきほし星と云うんだ。知ってるか。俺は鰯いわしのようなひよろひよろの魚やめだかの様なめくらの魚はみんなパクパク呑のでしまうんだ。それから一番痛快なのはまっすぐに行つてぐるつと円を描いてまっすぐにかえる位ゆっくりカーブを切るときだ。まるでからだの油がねとねとするぞ。さて、お前は天からの追放の書き付けを持って来たろうな。早く出せ。」

二人は顔を見合せました。チュンセ童子が

「僕らはそんなもの持たない。」と申しました。

すると鯨くじらが怒つて水の一つぐうつと口から吐はきました。ひとではみんな顔色を変えてよろよろしましたが二人はこらえてしやんと立っていました。



鯨が怖い顔をして云いました。

「書き付けを持たないのか。悪党め。ここに居るのはどんな悪いことを天上でして来たやつでも書き付けを持たなかったものはないぞ。貴様らは実にけしからん。さあ。呑んでしまふからそう思え。いいか。」鯨は口を大きくあけて身構えました。ひとでや近所の魚は巻き添えを食つては大変だと泥の中にもぐり込んだり一もくさんに逃げたりしました。

その時向うから銀色の光がパツと射して小さな海蛇がやって来ます。くじらは非常に愕ろいたらしく急いで口を閉めました。

海蛇は不思議そうに二人の頭の上をじつと見て云いました。

「あなた方はどうしたのですか。悪いことをなさつて天から落とされたお方ではないように思われますが。」

鯨が横から口を出しました。

「こいつらは追放の書き付けも持つてませんよ。」

海蛇が凄い目をして鯨をにらみつけて云いました。

「黙つておいで。生意気な。このお方がたをこいつらなんてお前がどうして云えるんだ。」

お前には善い事をしていた人の頭の上の後光が見えないのだ。悪い事をしたものなら頭の

上に黒い影法師が口をあいているからすぐわかる。お星さま方。こちらへお出で下さい。王の所へご案内申しあげましょう。おい、ひとで。あかりをとませ。こら、くじら。あんまり暴れてはいかんぞ。」

くじらが頭をかいて平伏しました。

愕ろいた事には赤い光のひとでが幅のひろい二列にぞろつとならんで丁度街道のあかりのようです。

「さあ、参りましょう。」海蛇は白髪を振って恭々しく申しました。二人はそれに続いてひとでの間を通りました。まもなく蒼ぐろい水あかりの中に大きな白い城の門があつてその扉がひとりでに開いて中から沢山の立派な海蛇が出て参りました。そして双子のお星さまたちは海蛇の王さまの前に導かれました。王様は白い長い髯の生えた老人でにこにこわらつて云いました。

「あなた方はチュンセ童子にポウセ童子。よく存じて居ります。あなた方が前にあの空の蠍の悪い心を命がけでお直しになつた話はここへも伝わつて居ります。私はそれをこちらの小学校の読本にも入れさせました。さて今度はとんだ災難で定めしびっくりなさいたでしょう。」

チユンセ童子が申しました。

「これはお語誠こしごまことに恐れ入ります。私共はもう天上にも帰れませんしできます事ならこちらで何なりみなさまのお役に立ちたいと存じます。」

王が云いました。

「いやいや、そのご謙遜けんそんは恐れ入ります。早速たつまき竜巻まきに云いつけて天上にお送りいたしましょう。お帰りになりましたらあなたの王様に海蛇うみへびめが宜よろしく申し上げたと仰おつしやつて下さい。」

ポウセ童子よぼうこが悦よろこんで申しました。

「それでは王様は私共の王様をご存じでいらつしやいますか。」

王はあわてて椅子いすを下くだつて申しました。

「いいえ、それどころではございません。王様はこの私の唯ただ一人の王でございませう。遠いむかしから私めの先生でございませう。私はあのお方の愚おろかなしもべでございませう。いや、まだおわかりになりますまい。けれどもやがておわかりでございませう。それでは夜の明けないうちに竜巻りゆうまきにお伴とも致いたさせませう。これ、これ。支度したくはいいか。」

一疋ひきのけらいの海蛇うみへびが

「はい、ご門の前にお待ちいたして居ります。」と答えました。

二人は丁寧<sup>ていねい</sup>に王にお辞儀をいたしました。

「それでは王様、ごきげんよろしゅう。いずれ改めて空からお礼を申しあげます。このお宮のいつまでも栄えますよう。」

王は立つて云いました。

「あなた方もどうかますます立派にお光り下さいますよう。それではごきげんよろしゅう

」。

けらいたちが一度に恭々しくお辞儀をしました。

童子たちは門の外に出ました。

竜巻が銀のとぐろを巻いてねています。

一人の海蛇が二人をその頭に載<sup>の</sup>せました。

二人はその角<sup>つの</sup>に取りつきました。

その時赤い光のひとでが沢山出て来て叫<sup>さけ</sup>びました。

「さよなら、どうか空の王様によろしく。私どももいつか許されますようおねがいたします。」

二人は一いっしょ緒しよに云いました。

「きつとそう申しあげます。やがて空でまたお目にかかりましょう。」

竜巻がそろりそろりと立ちあがりました。

「さよなら、さよなら。」

竜巻はもう頭をまっくろな海の上に出しました。と思うと急にバリバリツはげと烈しい音がして竜巻は水と一所に矢のように高く高くはせのぼりました。

まだ夜があけるのに余程間よほどがあります。天の川がずんずん近くなります。二人のお宮がもうはつきり見えます。

「一寸ちよつとあれをご覧なさい。」と闇やみの中で竜巻が申しました。

見るとあの大きな青白い光りのほうきぼしはばらばらにわかれてしまつて頭も尾も胴も別々にきちがいのような凄すこい声をあげガリガリ光つてまっ黒な海の中に落ちて行きます。

「あいつはなまこになりますよ。」と竜巻がしずかに云いました。

もう空の星めぐりの歌が聞えます。

そして童子たちはお宮につきました。

竜巻は二人をおろして

「さよなら、ごきげんよろしゅう」と云いながら風のように海に帰って行きました。

双子のお星さまはめいめいのお宮に昇りました。そしてきちんと座すわって見えない空の王様に申しました。

「私どもの不注意からしばらく役目を欠かしましてお申し訳けません。それにもかかわらず今晚はおめぐみによりまして不思議に助かりました。海の王様が沢山の尊敬をお伝えして呉くれと申されました。それから海の底のひとがお慈悲じひをねがいました。又私どもから申しあげますがなまこもしてきますならお許しを願う存じます。」

そして二人は銀笛ぎんてきをとりあげました。

東の空が黄金色きんいろになり、もう夜明けに間もありません。

# 青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

入力：野口英司

1999年7月23日公開

2004年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 双子の星

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>